



上から二人目ですでに手から入水しているスイマーがアルネ・ホリである。1924年にパリで開催されたこのオリンピックで100m自由形を制したのは後にターザン映画で有名になるジョニー・ワイスミュラーだった。ちょうどボリの上に写っている選手だ。

Most swimmers with one of these
have one of ours.

ロンドンのコベントガーデンには最新アイテムを揃えるスピード・フラッグシップ・ストアがある。



スピードの創始者アレキサンダー・マックレイ。1910年にスコットランドからオーストラリアのシドニーへ移住してきたところから物語はじまった。

【スピード物語】

SPEEDO

グレートブランド物語

Great Brand Story
第20回:文と構成 / 河村喜代子

人はスピードが好きなのだ。陸でも空でも水中でも今より一歩先を目指すことがスピードの本質だ。北京オリンピックで「レーザー」を着用してマイケル・フェルプスが泳いだ。表彰台の最高段に立ったのは歴代最多の8回を数えた。



レーザーバックを着用したアルネ・ホリ。1929年当時、水着そのものが軽くて選手の肩と腕の動きを妨げないデザインは革新的だった。この水着を着たホリは世界新記録を連発して「スウェーデンのハリケーン」と呼ばれた。



上の建物はイギリスのノッティンガムにあるスピードのヘッドクォーター。ブランドが生まれてから80年あまりが過ぎるなかで、水着を取り巻く社会は大きく変化した。スピード本社も来年末には近郊に建つ新しい社屋へ移転する計画が進む。

スピードがはじまった場所はオーストラリアである。1910年にスコットランドから移住してきたアレキサンダー・マックレイがはじめた。牛乳の販売などをしたあと、マックレイ・ホーザリ・マニユファクチャラーという下着をつくる会社を興した。これが1914年であり、当時の製品につけられたブランド名はフォーティエテュド。カ

強いとか、丈夫さを連想させる言葉だが、これはマックレイの出身地スコットランド北東部のクランのモットーからとったとされている。下着をつくる会社から水着製造へと軸足を移すことになった点については、下着と水着の位置関係が、当時ははるかに近いものだったことがまずある。どちらも身体に一番近いところで着用する

衣類である。またニットという製造技術の点でも大きな接点があった。ジャージー製造から水着製造へと転換した会社はスピードに限ったことではなかった。ただひとつ違っていたのは、スピードは水のなかでの速さを最初から意識していたことにある。そしてレーザーバックが1920年代に生まれ、ジャズエイジと呼ばれた時代の主役である

若者たちに支持された。身体の露出部分が多いレーザーバックのスタイルは、「お上品な伝統」の価値観に縛られたビクトリア時代生まれの親たち世代にはショックでさえあっただろう。そうした非難の視線を振り切った、後ろに置き去りにすることができたのは、より自由に、より速く泳ぐというスピードがもたらすスリルだったにちがいない。人はスピードが好きなのだ。後に社内コンペから生まれたキャッチフレーズ「スピードを着て、より速く」は、商品だけでなく、会社が進んでいく道も示していた。



FIG. 14

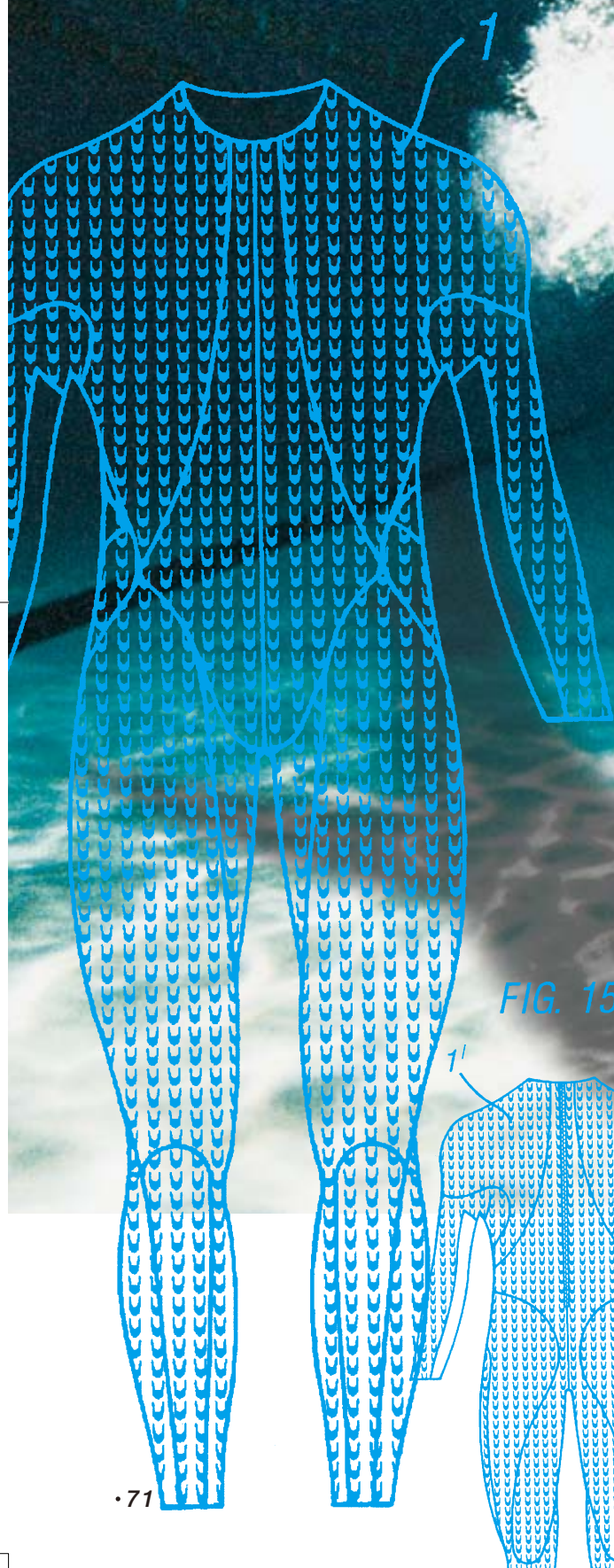
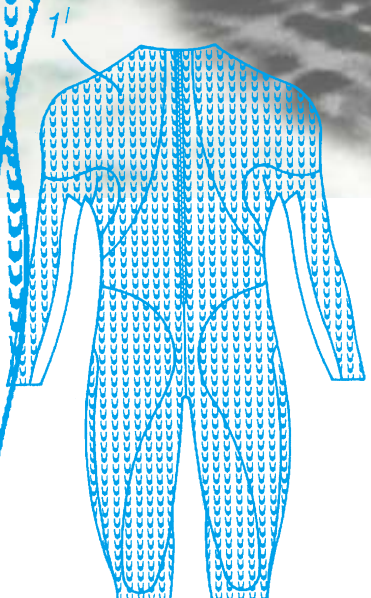


FIG. 15



1990年代から本格化した流水抵抗を下げるアクアラボによる研究は、2000年に発表したファストスキンで世界中を驚かせた。「V字をした小さな歯状突起は渦を発生させる。それを並べてプリントした生地は、より大きな渦を発生させる」。そしてふたつの水流を組み合わせることで水の流れをコントロールし、抵抗を減らす。それを実現したのがファストスキンであり、手本はサメだった。自然界に存在する優れたデザインを採用したファストスキンは以後も改良がつづいた。左の特許US.Pat.No.6446264 B2(2002年)による模式図は「水の抵抗を下げるために配置することが望ましい」とされるV字の突起をプリントする部位を示している。



2000年のファストスキンは驚きだった。サメの皮膚をまねる発想はスピードの研究開発室、アクアラボから出てきた。研究開発室の成果は一般のスイマー向け水着やゴーグルなどにも反映されていく。



1920年代のスピードを代表するレーサーバツクの水着は、フアツシヨンの水着というよりも、アスリートのためのギアだった。それを起点にオリピックを迎えるたびに生まれる最速の記録のそばには、いつもスピードの水着がいた。1932年はアメリカ中が不況の底に沈んでいた時代だが、ロサンゼルスでオリピックが開催された金メダルを獲得したのはオーストラリアのクレア・デニスだった。この時もまた、肩が出すぎたと問題になった。ベルリン大会では、オーストラリアの男子チームがスピードの水着を着た。これは胸をカバーする部分が多かった。布地による水の抵抗を減らすのが目的だった。これ以後、競泳用水着は身体をおおう面積をどんどん減らしていく。男性用ではボクサースタイルからブリーフスタイルになった。女性用の水着は、1976年のモントリオール大会と次のロサンゼルス大会とでは明らかに後者の方がレックラインが深い。1992年のバルセロナでははっきりとハイレグスタ

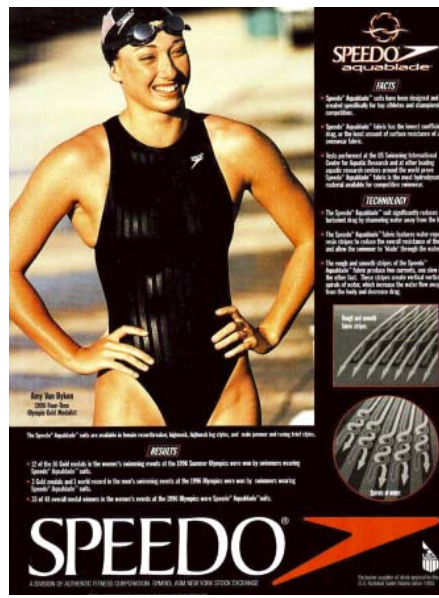
D.ヤオマンの所属するアクアラボが世界を驚かす最速水着の扉を開く
 1920年代のスピードを代表するレーサーバツクの水着は、フアツシヨンの水着というよりも、アスリートのためのギアだった。それを起点にオリピックを迎えるたびに生まれる最速の記録のそばには、いつもスピードの水着がいた。1932年はアメリカ中が不況の底に沈んでいた時代だが、ロサンゼルスでオリピックが開催された金メダルを獲得したのはオーストラリアのクレア・デニスだった。この時もまた、肩が出すぎたと問題になった。ベルリン大会では、オーストラリアの男子チームがスピードの水着を着た。これは胸をカバーする部分が多かった。布地による水の抵抗を減らすのが目的だった。これ以後、競泳用水着は身体をおおう面積をどんどん減らしていく。男性用ではボクサースタイルからブリーフスタイルになった。女性用の水着は、1976年のモントリオール大会と次のロサンゼルス大会とでは明らかに後者の方がレックラインが深い。1992年のバルセロナでははっきりとハイレグスタ



イルになっていた。デザインが注目を集める一方で、素材研究も進んだ。スピードは1957年に化学繊維のナイロンを、水着として最初に採用した。軽く水を含まず、速乾性がある繊維の特性に着目したからだ。ライクラあるいはスパンデックスといわれる伸縮性に富んだ化学繊維を採用して、より身体にフィットする水着の開発を目指した。1990年代を迎えるころには、デザインと素材開発が、より工学的になる。バルセロナ・



オリピックのスイムスーツS2000ではハイネックのスタイルを取り入れる。アトランタ・オリピックで注目された水着は、スピードの研究開発部門であるアクアラボが開発にあたった。この水着に使われた生地にはよく見ると筋があった。撥水性のある樹脂、レジンを塗って生地に滑らかな筋を付けたのだ。これで速く流れる水と遅く流れる水とで渦が生じる。それによって身体にまとわりつく水を減らして抵抗を減らすことを目指した。その結果、選手はまるで水をブレードで切るかのように泳げるということからアクアブレード



上)アクアラボのデブ・ヤオマンは選手のそばで過ごす時間が長い。水着の現場を重視する。それは選手の声や声や聞こえることだ。中)M.フルブスのサイン入りジャマー。下右中)1992年のスイムスーツS2000と1996年のアクアブレードのポスター。下左)デザインチームは研究によって生まれた新しい水着にトレンドを反映させて商品にする。

と名付けられた。アクアラボでの計画によると、S2000より8%低い流水抵抗を実現したという。流体力学による開発は、2000年に入るとますます進化の度を高めていく。より広い分野の専門家や研究機関と協力して開発が進められた。そのなかで真に革新的な素材と話題を集めたのがファストスキンだった。この素材はロンドンの自然史博物館と共同して生まれたもので、生地の表面にサメの肌のような細かい突起がついていて、ファストスキンを使った水着は、全身をカバーするフルボディスタイルでも注目を集めた。

水着は小さいほどいいとされたレス・イズ・ベター時代の完全に過去のものとなった。スピードではフルボディの水着の方が、人の皮膚が水と接する時に生じる摩擦が小さく抑えられるからだ」と説明する。この結論を導き出すために、スピードでは世界各国の研究組織や機関と共同でデータ収集を行った。それにはNASA（アメリカ航空宇宙局）での風洞実験も含まれる。これは本来、空気を動く飛行機や宇宙船に生じる抗力を測定するための実験装置である。NASAで実験を行ったために、実験に関わる者は、資格適正検査を受けてクリアランスを取得して60種類を超える素材のテストを繰り返した。そのデータを元に、次には流水プールで実験をした。この実験はニュージーランドのオタゴ大学の巨大水槽を利用して進められた。マネキンや実際のスイマーのポテスキャンを行ってつくった水着を着せて、選手がどんな動きをする時に、どのような抵抗がどこに働くのかを測定した。そこで収集したデータを、コンピュータ流体力学(CFD)というモデリング技術を使って身体どの位置に大きな抵抗が生まれるの



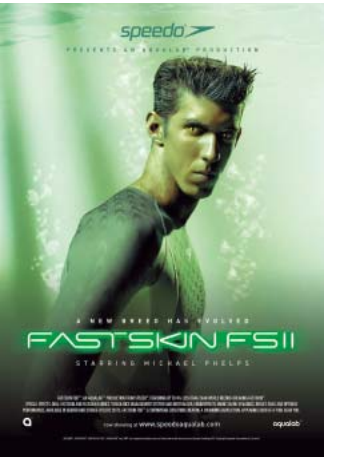
下がってくるという情報が伝えられたことから開発が進められたという。スピードのアクアラボでは、地球規模でデータ収集から実験、そして実際の製品づくりを展開している。利用する技術はハイテクだが、人と人の関わりを大切にしている。関係が結ばれていなければ、こうした開発につながり種は時かかるとはなかつたはずだ。そんなことを信じさせてくれる話だ。アクアラボで10年のキャリアをもつD・ヤオマンは失敗はあるかと聞かれたインタビューで、間髪を入れずに「メニ」と答えた。これこそはアクアラボがもつ柔らかな精神のあらわれである。そして失敗して立ち止まるのではなく、次のチャレンジに向かうタフさを証明している。

0・01秒の単位で勝敗をわけるスピードが支配する世界では、デザインは単なるモノのかたちでは済まない。単に美しさのために働くデザインではなく、機能が発揮されない。機能がデザイン



スピード・インターナショナルのマーケティング部門副社長を務めるジェイソン・ランス。2005年に入社し現在は世界173地点に広がるスピードの市場戦略を立案統括する。

2012年のロンドンオリンピックではどんな驚きが待っているのか。スピードの動きから目が離せない。



身長193cmのマイケル・フェルプスが両手を広げると201cmになる。この長い両手で2008年北京オリンピックでは8個の金メダルをかき集めたのは記憶に新しいところ。それには彼がもつ身体能力を引き出す厳しいトレーニングがあったのはもちろんとしてスピードのレーザー・レーサーの存在があった。ファストスキンFS II、FS-PRO、レーザーレーサーと次々に開発してきたスピードの次の動きに世界中が注目している。

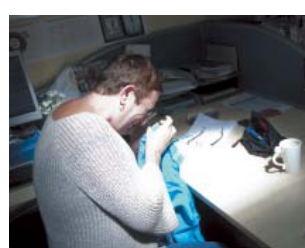
かの予測も行った。この技術のおかげで身体と接する部分での水の速さや方向、水流が身体どこで離れていくのか、水流がどこでぶつかるのかなどを調べつくすことができた。抵抗がどこで高くなって、どの部分で低くなるのかを知ることが、それに適した素材を選び出す時に欠かせなかったからだ。こうした一連の実験が繰り返されてきた素材こそが、レーザーパネルだ。これは2008年北京オリンピックで、レーザー・レーサーとして話題を集めた水着に使われることになった素材である。マイケル・フェルプスが8個の金メダルを首にかけることになった水着だ。レーザー・レーサーにはレーザーパネル以外にも、体幹を保持することを目的にした機能を発揮するコアスタビライザーが組み込まれている。これは選手を一番よく知る立場にあるコーチから、選手が疲れてくるとうしても腰が下がり、足が



スピードのアクアラボで10年のキャリアを重ね、水着開発の先頭に立ってきたデブ・ヤオマン。



コベントガーデンにあるスピード・フラッグシップ・ショップで注目をあつめるのはやはりレーザー・レーサーのコーナー。オリンピックで使われたのと同じ技術を使って一般スイマー向けにモディファイされたモデルも並ぶ。



左) ノッティンガムのスピード本社内にあるアクアラボ。ここでは部外者立ち入り禁止。中) ロンドンのショップにて。競技用の水着のほかにもトレンド感あふれるアイテムが並ぶ。右) 品質管理担当者が製品細部まで念入りにチェックしている。

と不可分になり、それが美しくワクワクさせてくれるものになる。最速の水着は今、そんな状況を迎えている。そこでキープレーヤーの立場にいるのがスピードの水着だ。